

新

歌人群像

岡本かの子

いのち華やぐ

日高堯子



川の流れ、命の流れ

六月のひと日、私は東急田園都市線の高津駅に降り立った。岡本かの子の生地を訪れるためである。駅から車で十分ほどゆるゆると走り、厚木街道へ入ると、二子の町並みの中に、じきにかの子の生家、大買家のあった所が見つかる。古くは神奈川県橋樹郡高津村二子、現在の川崎市高津区二子である。

車を降りると、旧街道のせいか道路は狭く、車の往来もかなり激しい。つい最近まで大貫病院があったという大買家の跡は、現在はマンション建設用地となつて、ひとときわ埃っぽい。工事の塀の前に「岡本かの子の生家の跡」の札が土埃をかむっている。私が札をたしかめたり、工事の塀の中を覗いていると、地元の人だろう、通りがかつた男性が歩みを止めた。そして、ここに昔は十八もの蔵が並び立っていたことや、最後の蔵の荷を運び出した日の様子などを、懐かしげに語ってくれた。

生家の跡地から多摩川の方へ少し歩くと、河畔に小さな社があり、境内が公園になっている。その一角に小高い塚が築かれ、中央に岡本太郎の手になる白い彫刻が、きりきりと螺旋を描きながら空を突き刺している。岡本

かの子の文学碑である。まわりには草が生え、空き缶もころがっているが、碑は白い炎のように超然とそそり立っている。そしてそこから初夏の多摩川の名めらかな水が、ゆつたりと胸を広げて流れているのが見渡せた。

多摩川の清く冷たくやはらかき水のこころを誰に語らむ

一杯の水をふくめば天地の自由を得たる心地こそすれ

第一歌集『かるきねたみ』に多摩川の水が歌われている。多摩川の流れがそのまま自分の心であるような、水との独特な一体感がある歌である。この一体感には、水を口にくくむというような、柔らかな、生の身体感覚があることも特徴だろう。

かの子の耳のほとりに川が一筋流れてゐる。さらさらと僻まず、あせらず、凝滞せぬ素直なかの女の命の流れと共に絶えず、かの女の耳のほとりを流れてゐる。かの子の川への絶えざるあこがれ、思慕、追憶が、かの女の耳のほとりへ超現実の川の流れを絶えず一筋流してゐる。

〔川〕

初期の短編「川」にこのような文章がある。

結婚する前のかの子は、よく一人で多摩川を眺め、思いにふけていたという。かの子の身体の源に、この川の水が命のかなしみとして、また文学の原動力として、深々と流れていたことを記憶しておきたい。

岡本かの子、本名カノは、一八八九（明治二十二年）年三月一日、大貫寅吉、アイの長女として生まれた。家は二子玉川の旧家、豪商大和屋だが、生まれたのは東京・青山南町にある別邸で、ここに五歳までいる。かの子は腺病質の体質だったが、父寅吉に溺愛され、贅沢に、天衣無縫に育つ。高津尋常高等小学校を卒業後、跡見女学校に入学。すでにこの頃より、文学好きの兄、雪之助（筆名晶川）に刺激され、文学書を乱読し、短歌や新体詩を投稿する早熟ぶりだった。兄とともに与謝野鉄幹、晶子の新詩社を訪ねたかの子は、一九〇七（明治四十）年から「明星」に歌を発表しはじめている。文学の出版において、この兄、晶川の影響は大きい。

愛のなやみ 魔の時代

一九一〇（明治四十三）年八月、かの子は当時まだ美術学校を出たばかりの岡本一平と結婚、翌年二月には長男太郎を出産する。だ



1922（大正11）年頃

が、運命的な伴侶ともなる一平との生活は、すぐに破綻しはじめる。二子の父母のもとで万事おっとりとした姫さま育ちのかの子と、庶民的な都会っ子一平とでは、感覚も暮らし方も全く違ふといつてよく、二人の現実生活が軋みはじめるのは、むしろ当然のなりゆきとも見えた。

一平は結婚後まもなく、朝日新聞に描いたコマ絵がきっかけとなり、漫画家として一躍時代の寵児となる。だがそれと同時に放蕩がはじまり、家をかえりみなくなるのである。かの子は暮らしの才覚もないまま、食べ物にも事欠く状態でほうっておかれ、赤ん坊の太郎を抱きながら、愛の理想への失望を深く噛みしめる目がつづくのである。

かの子の悲嘆はそれだけではすまなかった。生家が破産し、財産の九分九厘まで失うとい

岡本かの子

1925（大正14）年、青山の自宅で。左から、かの子、太郎、一平



う事件の渦中で、兄、晶川が急逝。かの子にとつて晶川は人生の師であり、文学の先達者であった。悲嘆に暮れて虚脱状態のかの子を、さすがに見過ごせなかつた一平は、かの子の歌集出版を取り計る。第一歌集『かろきねたみ』（一九二二（大正元）年）である。

ともすればかろきねたみのきざし来る
日かなかなしくものなど縫はむ
貝などのこぼれしごとく我が足の爪の
光れる昼の湯の底
人妻をうばはむほどの強さをば持てる
男のあらば奪られむ

『かろきねたみ』には、新妻の可憐な憂愁や、若い肉体へのナルシズム、愛への自我宣言などが浪漫的に、たおやかに歌われ、作風には「明星」の影響も強い。だが、歌集出版の喜びもつかの間、かの子にはさらに凶事がつづく。母アイが逝去、一平が再び放蕩に戻るという苦悩の中で、かの子の長女、次男が相次いで生まれては死亡する。夫婦生活は危機的状态となり、かの子の神経は疲弊し、病んでいく。一時は神経衰弱で入院し、二年ほどは歌もつくっていない。かの子の魔の時代である。

だが実は、苦悩していたのはかの子一人ではなく、一平もまた芸術と生活との間で何かいいがたい生の懊悩を味わっていた。放蕩生活からようやく目覚めた一平は、かの子とともに生きる思想を模索し、仏教にたどりつく。このような中で一九一八（大正七）年、かの子は『愛のなやみ』を出版する。

かの子かの子はや泣きやめて淋しげに
添ひ臥す雛に子守歌せよ
この淋しき人の世を行く道づれとなり
てたまへや恋ならずとも
我儘の妻にもなれてかにかくに君三十
路男となりたまひけり

仏教への接近と帰依

危機的な現実生活を背景にしているといつても、かの子の歌う苦悩は決して所帯じみたものではなく、あくまでも愛のなやみ、生きるなやみである。歌人としての評価が定まっていくと同時に、かの子は仏教研究に邁進し、多くの仏教論、入門書、随筆を執筆、仏教研究家として活躍する。一方、一平は、放蕩から一転してかの子の保護者、崇拜者としての己の位置を定め、以後、ひたすらかの子の文学のために自分の生涯を捧げることになる。

夫婦でありながら禁欲を貫き、かの子に恋愛を許し、愛人を一人ならず同居させるなど、常識の枠をこえた一平・かの子夫婦のスタイルが定まっていく。そこにはおそらく、仏教思想が反映した愛の理念があつたのではないだろうか。二人の人間としての謎の大きさ——深く愛し、深く苦悩する生命の魅力もまたそこにある。

仏教への接近と帰依は、かの子の「生命」の視点を大きく成熟させていく。

桜ばないのち一ばいに咲くからに生命
をかけてわが眺めたり

1930（昭和5）年、渡欧途中のインド洋上の箱根丸船上で正月を迎える。左から、一平、太郎、かの子



ひえびえと咲きたわみたる桜花のした
ひえびえとせまる肉体の感じ
にほやかにさくら描かむと春陽のもと
ぬばたまの墨をすり流したり
狂人のわれが見にける十年まへの真赤
きさくら真黒きさくら

一九二五（大正十四）年、かの子は第三歌集『浴身』を刊行、高い評価を得た。この中には代表作「桜百首」も収められている。短期間に没頭してつくられたというこの連作には、桜の精が乗り移ったように絢爛と言葉が

走り、感覚が冴え、幻想と狂気とがないまぜになった熱情が、時になまなましく迫る。桜の命とかの子の命とが、無垢に、天真爛漫に切り結び、かの子の肉体の生気さえ匂ってくる。かの子はここで、まぎれもなく自身の歌の生命を発見したといつていい。

かなしみと華やぎ

だが、このころよりかの子の創作意識は歌から小説へ移っていき、「生命」のテーマはむしろ小説で華麗に開花することになる。『浴身』の四年後に、かの子は歌との縁を切るように「わが最終歌集」（一九二九（昭和四）年）を出版し、渡欧する一平に従って、太郎と愛人ともども日本を離れるのである。

三年後、帰国すると、噴火したように小説を書きはじめ、爆発的に発表。短い期間に小説家としての地位を不動のものとしながら、一九三九（昭和十四）年に急死。四十九歳であつた。

かの子は『わが最終歌集』の後も、歌を手放すことはなかった。この歌集には一千首に近い歌が収められているが、その後に詠んだ歌数もまた膨大である。これらの歌は数が多しただけに未だ十分には読み解かれていない。

後期のかの子が、むしろ小説家と認知されているせいもある。特定の師をもたなかったかの子だが、大正期の異彩を放つ歌人として、存在の大きさはまぎれもない。

おほわた
大海洋の果のはてなる天心か地軸にか
わが生命繫る

さくらばな花體を解きて人のふむこま
かき砂利に交りけるかも

うつし世を夢幻とおもへども百合あか
あかと咲きにけるかな

年々にわが悲みは深くしていよよ華や
ぐ命なりけり

後期の歌には、生の思索を深めた静謐な抒情や、かの子ならではの命の表現が閃光のようには散らばっており、歌人の全容を知る上で見過ごせない。たとえばこれらの歌には、おそらく「空」や「無」という仏教思想を通して生命観がある。巨大な生命の流れに連なることのかなしみと華やぎ。それがかの子の歌う「生命」の到達点であろうか。生々流転の響きの中に、私はあの多摩川の水の音を、そして「水のこころを誰に語らむ」というかの子の声を、再び遥々と聞くのである。

（ひたか・たかこ「かりん」）